「中山道太田宿その歴史と特長」

お話　間宮瑞夫（みずお）さん（下米田町）　林　復明（またあき）さん（太田本町）

林　復明さん

太田宿の歴史は、中山道の歴史でもあります。その中山道の歴史と特長について、歴史に詳しいお二人に伺いました。

中山道の特長はどこにあると思われますか？

間宮：江戸と京都を結ぶ交通路として東海道と中山道がありました。東海道は、大井川など大きな川を渡る必要があり、難所が何カ所もありました。

しかし、中山道の主な難所は、「木曽のかけはし、太田の渡し、碓氷峠がなくばよい」と馬子歌に歌われたように東海道と比べて少なかったのではないでしょうか。もちろん、険しい山岳路はありましたが、比較的通行は容易だったと思いますよ。

幕府にとって、道路網の整備は、中山道も含め軍事上の位置づけが大きかったと思います。

諸国の大名が、江戸で何かあったときにすぐに駆けつけようとしても、東海道を進めば大井川など増水して川止めされてしまい、江戸への到着が遅れてしまいます。

しかし、中山道を利用すれば、足止めの日数は少なくてすみます。そうしたことから、中山道の往来も増えてきたものと思われます。

林：中山道については、間宮さんがお話なされたとおりですが、わたしは、太田の渡しについて少しお話しします。

木曽川は、今はゆったりとした流れになっていますが、わたしが子どものころは、急な瀬が何カ所もありました。

なかでも松ヶ瀬は、大波で岸が見えないときもあり、大きな波は高さ３メートルにもなりました。

その松ヶ瀬は、現在、祐泉寺南から約１５０メートル上流付近の護岸堤防の下になってしまいました「すべり石」という大きな岩と、可児市土田の「渡（わたり）」を結んだ上流側にあたります。

間宮：昔、木曽川には、岩がたくさんあり場所よっては、岩に流れを遮られ水がよどむ場所がありました。木曽川には、そうしたところが何カ所もありました。

昔木曽川を泳いで渡るときには、祐泉寺下の河原に衣服を脱いで、太田橋下流付近から泳ぎはじめると、祐泉寺の対岸の土田側に着いた記憶があります。

それほど、急な流れでしたね。

林：さて、太田宿の特長である「渡し場」については、記録によれば、３回ほど移動しているとあります。

その一つが、先ほどお話した「すべり石」の上流であったとされてます。

そのすべり石は、約十畳ほどの大きさで、今は護岸堤防の下になっていますが、護岸堤防の壁面には、そのいわれが書かれた銘板が埋め込んであります。

江戸時代の文献にも「すべり石」は出てきますが、その石は木曽川の流れの中にあり、現在護岸堤防の下になっている石とは違います。

その後、「モロウド」の上流部に移動し、太田橋の下流付近へと渡し場が移っていったものされています。

間宮：記録では、毎年船着き場は、作り替えていたようです。というのも、大水が出ると船着き場が流されてしまうためでしたが、当時の記録では、その修復も大変だったようです。

具体的にどのようなところが・・・

間宮：それは、大名の参勤交代の時期が、雪解け水の増水時に重なるため、冷たい川に入り船着き場を建設したようですね。船を接岸するために、川底の大きな石を取り除かねばならず、大変だったようです。

４００年の間には、同じ宿場町でも時代と共に衰退していった宿場も多いと